

第4編

第13章

埋蔵文化財調査室



第1節 沿革

日本の大学の多くは遺跡の上に建っている。それは大学がしばしば地盤の安定したやや高めのところ立地し、そうした所には古来、人が好んで住み、その跡が埋もれて地下に重なっているからである。遺跡をもつ大学では建物の改築など学内開発事業の度に事前の調査が必要になり、開発と埋蔵文化財保護との調整を円滑に進めるために大学独自の調査組織をもつことが少なくない。調査組織の多くは埋蔵文化財調査室と呼ばれるが（東京大学・大阪大学・徳島大学・広島大学・愛媛大学・九州大学・鹿児島大学など）、中には埋蔵文化財センターとして運営されているところもあり（東北大学・岡山大学など）、多くは全学組織の委員会と連携して運営されている。熊本大学の埋蔵文化財調査室もこのような組織として誕生した。大学の発掘調査組織の多くが昭和50年代終わり頃から1998（平成10）年までに設置されたことを鑑みれば、熊本大学における調査組織の設置はその後半期にあたるといえよう。

1993（平成5）年、熊本大学のすべての地区において学内再開発事業が決定され、その速やかな実現が運営上喫緊の課題となった。ただ、開発対象のどの地区にも遺跡が存在していること、また、これらが地域史を復元する上で重要な意味をもつ遺跡であることから、事前の発掘調査は不可避であった。こうしたことを背景に、市内の埋蔵文化財を管轄する熊本市教育委員会文化課（現熊本市教育委員会観光文化交流局文化振興課）の意向と文学部考古学研究室の甲元眞之教授の尽力によって学内調査組織の立ち上げが進み、1994（平成6）年4月、熊本大学埋蔵文化財調査委員会（以下「委員会」）が発足した。この中で埋蔵文化財の発掘調査に関する業務を行うための組織として、埋蔵文化財調査室（以下「調査室」）が委員会の下に設置された（熊本大学埋蔵文化財調査委員会規則第7条、平成23年10月埋蔵文化財調査センターに改組）。委員会は各部・附属病院の院長・図書館長・事務局長・埋蔵文化財調査室長による全学組織であり、調査室は室長・調査員・事務補佐員からなる組織とされた。また、調査室は、国立大学法人熊本大学の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する業務として、①実施計画の立案及び実施に関すること、②出土した埋蔵文化財の整理、保管及び保存に関すること、③文化庁等に提出する報告書の作成に関すること、④そのほか必要な事項を行うこととされた。

調査室長に甲元教授が就任し、考古学研究室を卒業した原田範昭が調査員（助手）として、矢野希久代が事務補佐員としてそれぞれ就任し、ここに調査室の業務が正式に始まった。埋蔵文化財調査委員会委員長は、工学部の北野隆教授が任にあたった。翌年、原田助手の後を小畑弘己助教授が引き継いで精力的に調査を実施し、工学部、病院における大規模な再開発が進んだ。この間、大坪志子助手がスタッフに加わり調査員数は2名となったが、それでも対応能力を超える開発事業が計画されることがあり、こうした場合には有期雇用職員を投入して調査を行った。爾来17年、調査室は大小の調査を経常的に実施している。歴代の調査室スタッフ等を表1に示す。

調査室が入所した建物は、1925（大正14）年に熊本高等工業学校の標本館として建てられた由緒ある建築物であった。現在熊本大学本部事務局として使われている本館と同じ材料及び意匠によるグレーの2階建てコンクリート建築である。西洋古代建築を専門とする

表1 埋蔵文化財調査室の職員・埋蔵文化財調査委員会委員長一覧（1994～2009年）

年月日	室長	調査員		事務補佐員	埋蔵文化財調査委員会委員長	
1994年5月16日	甲元 眞之	原田 範昭 (助手)		矢野希久代	北野 隆	
1995年4月1日						
1997年4月1日				大坪 志子		
1998年8月1日				松嶋木綿子		
2000年4月1日			小畑 弘己 (助教授)	富永 明子		
2002年4月1日		大坪 志子 (助手)		坂元 紀乃		
2004年4月1日						
2005年1月17日				檀 佳克 (有期雇用職員)		前田 知聖
4月1日						
10月1日						
2006年4月1日	木下 尚子	大坪 志子 (助教)	小畑 弘己 (准教授)	江頭 俊介 (有期雇用職員)	伊藤 重剛	
2007年4月1日				中川木綿子		
2008年4月1日						
2009年4月1日				村田 知聖		

伊藤重剛教授（埋蔵文化財調査委員会委員長）によると、「日本のコンクリート建築の初期の頃の建物であるため、それ以前の石造りや煉瓦造りの作り方をコンクリート造りに置き換えており、現在のコンクリート造り工法とは異なる過渡期の様相を見せている。内部に見られる各柱の柱頭や階段回りの装飾、外部においても北側正面の細かい意匠や側面の柱形、パラペットの刷毛引きなど、明治の建築様式の名残をとどめており興味深い」とのこと。我々は長く文化財の中で調査・研究に励むという貴重な体験をしてきたことになる。ただ築85年に及んでいることから安全面や作業環境に多くの問題を抱えており、職場の環境改善は長年のかつ最大の要求であった。2009（平成21）年、旧施設部（運営基盤管理部）の尽力により南地区の白川に臨むボイラー室を改装し、同年6月に念願の引越しを果たした。新しい調査室は2階建てで十分な作業スペースを確保し、小さな展示室も併設した。白川に臨む環境は快適である。

調査室発足以来17年の発掘調査によって、黒髪地区、本荘・九品寺地区・大江地区にのこる遺跡の内容は飛躍的に明らかになった。1300～1000年前の奈良・平安時代、黒髪地区は飽田郡の有力氏族である建部公一族の居住地（飽田郡家）の可能性が高く、本荘・九品寺地区は豪族の氏寺であり、大江地区は詫間郡家や渡鹿廃寺に続く一帯の住宅地であった。更に遡る古墳時代には墓や村があったこと、2500年前の弥生時代には北部九州の文化が強く及ぶ墓地であったこと、縄文時代にはその早い時期（8000年前）から人々の生活の営みのあったことも明らかになった。次節以降にその具体像を示す。

第2節 活動の軌跡

1 調査活動

調査室が発足して以降、実施してきた調査実績は表2の通りである。

表2 年度ごとの調査件数と年報・報告書番号

調査年度	発掘調査件数	立会調査件数	試掘調査件数	年報No.	報告書No.
1994	9	9	0	1	I
1995	5	17	4	2	I
1996	8	10	3	3	
1997	1	7	1	4	
1998	5	15	4	5	V
1999	3	8	3	6	VI
2000	4	17	2	7	VI
2001	4	18	1	8	VI
2002	4	16	2	9	
2003	5	31	4	10	
2004	5	43	6	11	II ※1
2005	6	84	0	12	III ※2
2006	7	52	0	13	
2007	6	50	3	14	V
2008	10	71	0	15	
2009	6	54	0	16	

※1 0402調査地点に関する報告書

※2 0425調査地点に関する報告書

調査室による本学構内遺跡の調査は、1994（平成6）年渡鹿グラウンドの整備及び黒髪北地区の福利施設（現くすの木会館）建設工事に伴う発掘調査を端緒として、黒髪南地区（工学部・理学部）、本荘・九品寺地区A、本荘・九品寺地区Bを中心とした校舎建設等の施設整備事業の実施に伴い、各キャンパスで調査を実施してきた。

黒髪北地区では、くすの木会館（1994年度）と文化部室（1998年度）取設工事以降は、道路敷設や外灯設置など環境整備に関わる事業が主で発掘調査はほとんど実施されなかったが、2004（平成16）・2005（平成17）年度に附属図書館南棟・放送大学熊本学習センターの建設事業に伴い発掘調査を実施した。2008（平成20）年度より本地区の校舎改修事業が始まり、主として機械設備工事・環境整備に伴い、調査を実施している。

黒髪南地区では、1994（平成6）年から2002（平成14）年にかけて7棟の大型建物の建設事業を中心として、機械設備整備事業（電気・水道・ガス）に伴い調査を実施してきた。自然科学研究科理学部研究棟（1998年度）及びベンチャービジネス・ラボラトリー・衝撃・極限環境センターの建設事業は、補正予算により年報作成期間である年度末に急遽浮上した事業であった。作成業務の一部を業務委託するなどの対応をとり、竣工に遅延をきたさぬよう尽力した経緯がある。

本荘・九品寺地区Aは、基礎医学研究棟建設（1996年度）に伴う発掘調査を皮切りに、西病棟（1999年度）など5棟の大型建物や病院機能の維持に必要な設備棟及び機械設備や

環境整備に伴い調査を実施した。本荘北地区での発掘調査は、面積がほかの地区での調査事例と比較して広いものが多く、本地区は遺跡の残存状態が良いため遺物・遺構ともに密集して検出されることが特徴である。

本荘・九品寺地区Bは、生命資源研究支援センター・動物資源開発研究施設（1995年度）の建設工事をはじめとする3棟の大型建物建設事業と機械設備工事に伴う調査を実施した。本地区では、既設の校舎の取り壊しも実施されたが、撤去前に建物基礎の間の調査を実施し、既設建物の地下であっても埋蔵文化財が遺されていることを明らかにした。埋蔵文化財包蔵地内における事業については、慎重な判断が求められることを示した事例である。

このほか、附属特別支援学校、大江地区、本荘・九品寺地区C、附属小・中学校、附属幼稚園、大江総合グラウンド、寄宿舎・国際交流会館、合津マリンステーションなど各地区において、建物やライフラインの整備・補修にあたって埋蔵文化財の調査と保護を行った。

2 年報・報告書

埋蔵文化財の調査は記録保存が前提であるため、発掘調査報告書の刊行までが調査とみなされる。本調査室では、年度ごとに調査結果の概略を『熊本大学埋蔵文化財調査室年報』として刊行し、正式な発掘調査報告書の刊行についても2003（平成15）年より刊行を進めている。現在、調査室年報は16号（2009年度分）まで、発掘調査報告書はⅥ号まで刊行し、発掘資料の公開に努めている。

表3 埋蔵文化財調査室の刊行物一覧

年 度	刊行物
1995	熊本大学埋蔵文化財調査室年報1
1996	熊本大学埋蔵文化財調査室年報2
1997	熊本大学埋蔵文化財調査室年報3
1998	熊本大学埋蔵文化財調査室年報4
1999	熊本大学埋蔵文化財調査室年報5
2000	熊本大学埋蔵文化財調査室年報6
2001	熊本大学埋蔵文化財調査室年報7
2002	熊本大学埋蔵文化財調査室年報8
2003	熊本大学埋蔵文化財調査室年報9 熊本大学構内遺跡発掘調査報告Ⅰ 熊本大学埋蔵文化財調査報告書第1集
2004	熊本大学埋蔵文化財調査室年報10
2005	熊本大学埋蔵文化財調査室年報11 熊本大学構内遺跡発掘調査報告Ⅱ 熊本大学埋蔵文化財調査報告書第2集
2006	熊本大学埋蔵文化財調査室年報12
2007	熊本大学埋蔵文化財調査室年報13 熊本大学構内遺跡発掘調査報告Ⅲ 熊本大学埋蔵文化財調査報告書第3集
2008	熊本大学埋蔵文化財調査室年報14 熊本大学構内遺跡発掘調査報告Ⅳ 熊本大学埋蔵文化財調査報告書第4集
2009	熊本大学埋蔵文化財調査室年報15 熊本大学構内遺跡発掘調査報告Ⅴ 熊本大学埋蔵文化財調査報告書第5集
2010	熊本大学埋蔵文化財調査室年報16 熊本大学構内遺跡発掘調査報告Ⅵ 熊本大学埋蔵文化財調査報告書第6集

3 普及活動

調査室の調査目的と対象である構内遺跡について、また、発掘調査で得られる成果が考古学研究にとって重要な基礎資料であることを広く知ってもらうため、調査室では次のような普及活動を行ってきた。1つは、調査状況に応じて現地説明会を実施し、調査期間中にしか見られない調査や遺跡の様子を公開した。2006(平成18)年には熊本大学埋蔵文化財調査室企画展「熊本大学を発掘する」を五高記念館にて開催し、各地区で得られた発掘調査の成果や出土品を紹介した。併せて展示特別企画①として小学生の親子を対象に縄文時代の勾玉作り実習を、展示特別企画②として展示内容と構内遺跡の調査成果を盛り込んだ調査員による考古学的な研究成果の講演会を実施した。このほか、小畑准教授の研究活動に関連して、2007(平成19)年1月29日に「モンゴル考古学最前線」、2009(平成21)年12月20日に「チンギス・カンに学ぶ地球環境問題」と題して考古学講演会を工学部百周年記念館にて開催した。ダムディンスレン・ツェベンドルジ(モンゴル科学アカデミー考古学研究所所長)、バトムフ・ツォグトバートル(モンゴル科学アカデミー考古学研究所副所長)、白石典之(新潟大学)の3名に、モンゴル国における考古学研究の成果についての講演を依頼した。



写真1 埋蔵文化財調査室企画展について報じる熊本日日新聞
2006年11月4日朝刊記事の一部を改編



写真2 勾玉作り実習の様子



写真3 考古学講演会の様子

第3節 構内遺跡と調査成果

第1項 黒髪地区

黒髪地区内における主な発掘調査地点については図1を参照されたい。

1 遺跡の概要

法・文・教育・工学・理学部が設置されている黒髪地区は黒髪町遺跡（熊本市埋蔵文化財地図No. 8-88）に含まれる。本遺跡は熊本市のほぼ北東端に位置する立田山（標高151.6m）の南西部の緩斜面にあり、西を坪井川が形成する沖積面と南を白川河岸の低位段丘によって囲まれる東西900m、南北1,000mの縄文時代～歴史時代に至る遺構・遺物を包蔵する遺跡である。1936（昭和11）年、大学に隣接する熊本県立中学済々黌（現済々黌高校）の校庭から弥生時代中期の甕棺2基が発見されたのを端緒に、1965（昭和40）年には隣接する九州女学院（現九州ルーテル学院大学）敷地においても甕棺が発見され、弥生時代中期の黒髪式土器の指標遺跡となった。更に1983（昭和58）年に実施された済々黌高校内における発掘調査によって古代の竪穴住居址と土師器・須恵器・黒色土器などの関連遺物が出土し、その中には「寺門」銘の墨書土器が含まれるなど、古代飽田郡における拠点的な性格をもつ遺跡であることが予想された¹。この一帯は、古代官道や駅伝制の研究上、文献で推定されていた延喜式にみる「蚕養駅」、旧飽田郡家の推定地としても注目を集めてきた²が、これまでの周辺遺跡での発掘成果や文献資料の検討、そして本学埋蔵文化財調査室による発掘成果を受けて、済々黌高校から本学黒髪地区周辺が飽田郡司建部公の居所、飽田郡家に比定されている³。

2 調査成果

本地域で最も古い遺物は、北地区9802調査地点（文化部室建設地）と南地区0302調査地点（総合研究棟共同溝建設地）で発見された縄文時代早期（8000年前）の押型文土器と石器類である。次に古い時期の遺物は南地区9907・0938調査地点（エコロジーシステム実験室接土工事箇所）から縄文時代後期前葉（4000年前）の土器群が発見されている。また、この黒髪南地区においては、縄文時代後期後半（3500～3000年前）を中心とした土器が包含層やほかの時期の遺構に伴って発見されている。

南地区の9704調査地点（工学部研究棟Ⅱ-2建設地）と0206調査地点（くすの木移植箇所）では、弥生時代中期後半（2000年前）の甕棺墓が検出されている（写真4）。この甕棺墓地は、9704地点から大学と民家の境の道路にかけてほぼ北西に直線状に配置されたものである。副葬遺物は含まれていなかったが、甕内部からは人骨2体が発見され、成年男性と熟年女性と判断された。

本地域において最も遺構・遺物が多く発見されるのが、7世紀後半～9世紀前半にかけての時期である。先に述べたように、本地域は古代官衙推定地であり、学内を古代官道が南北に貫いている。道路自体は発見されていないが、推定ラインにのる南地区0204調査地

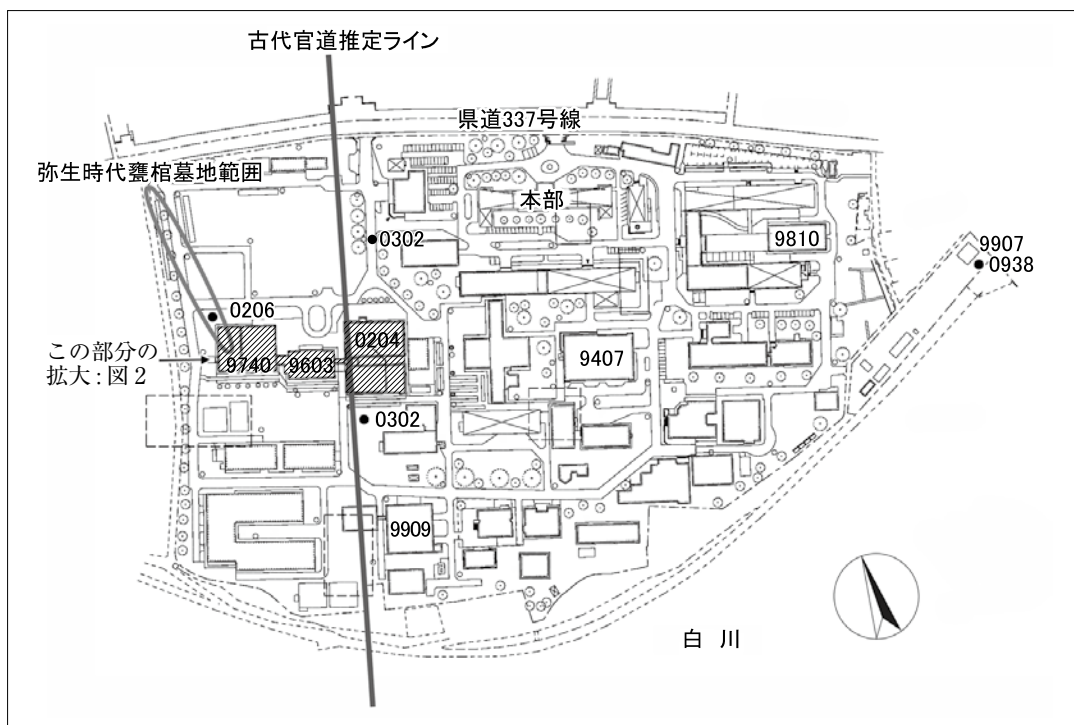


図1 黒髪南地区内における主な発掘調査地点

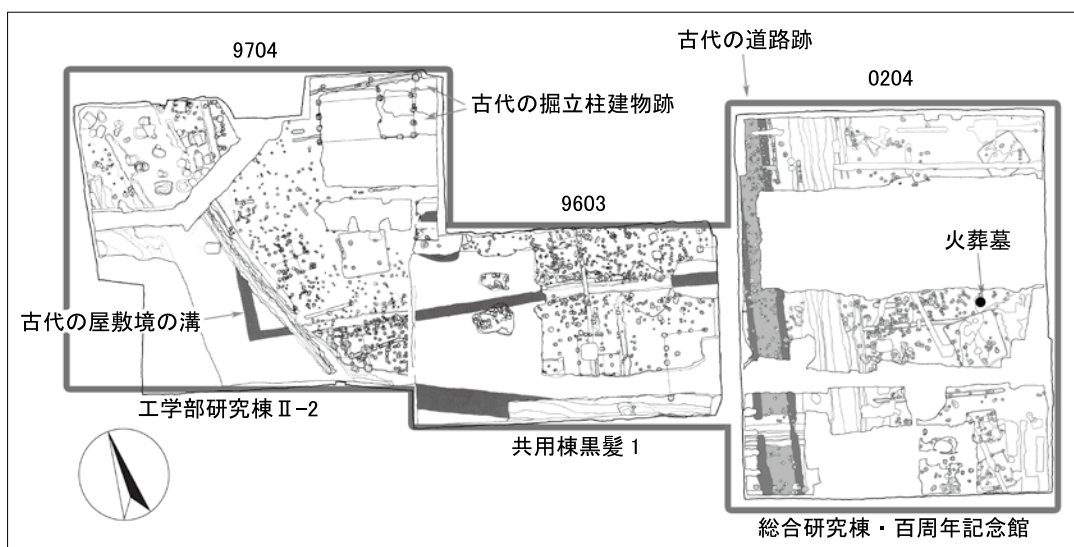


図2 黒髪南地区検出の古代官道と建物群の配置

点（総合研究棟建設地）の西側端には幅4mの距離を置いて並行しながら南北へ延びる2本の溝が検出されており、路面は残っていないが、道路の側溝である可能性が高い（図2）。この溝の西側からは、屋敷境を示すと思われる南北-東西方向の溝や掘立柱建物群が検出されている（南地区9603調査地点：共用棟黒髪Ⅰ建設地・9704調査地点：工学部研究棟Ⅱ-2



写真4 9704調査地点の弥生時代甕棺墓



写真5 0204調査地点の古代火葬墓



写真6 9412調査地点出土「國」銘土製印



写真7 9407調査地点出土の刻書土器と土馬

建設地)。これらは数時期の建て替えが認められる。0204調査地点からは土師器甕に須恵器壺の破片で蓋をした火葬骨の入った墓も発見されている(写真5)。

そのほかの古代官衙関連の遺物として、南地区9412調査地点(工学部研究棟I建設地)から「國」の字を刻んだ土製印(写真6)が、北地区9407調査地点(くすの木会館建設地)からは「馬」銘の刻書土器や土馬(祭祀具)が発見されている(写真7)。また、竪穴住居址も各調査地点で多数発見されており、その中にはこれら役所へ出仕した役人たちのすまいも含まれているものと思われる。10世紀代になると遺構・遺物ともに少なくなる。

第2項 本荘・九品寺地区

本荘・九品寺地区における主な発掘調査地点については図3を参照されたい。

1 遺跡の概要

医学部附属病院及び医学部保健学科が所在する本荘・九品寺地区は、本庄遺跡(熊本大学病院敷地遺跡、熊本市埋蔵文化財地図No. 8-95)を包括する。本遺跡は熊本平野を形成する扇状地形の中央を流れる白川の河岸堤防上に位置し、標高は12~13mである。附属病院の所在する白川寄りの地点が、標高が最も高く、南東部(医学部側)へと緩やかに傾斜している。敷地内を白川より分岐した小河川が暗渠として流れており、古来この一帯は流路を変えながら幾本もの小河川が流れていた可能性が高い。1963(昭和38)年ごろ本学医学

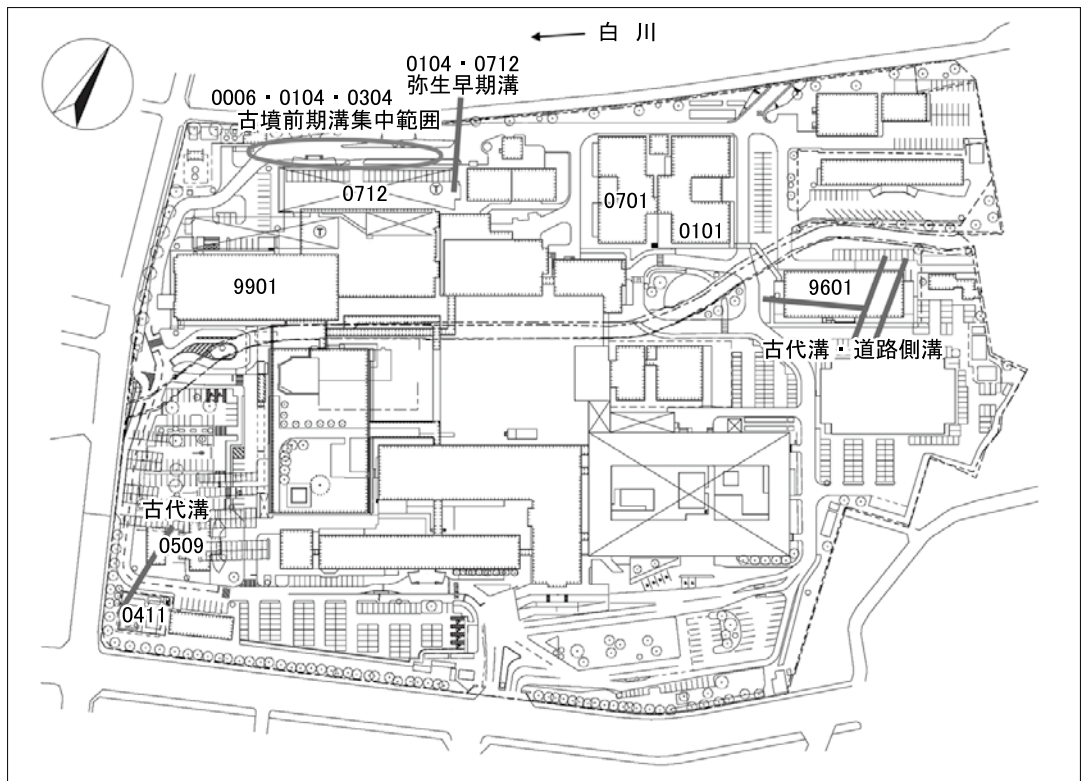


図3 本荘・九品寺地区A内における主な発掘調査地点

部附属病院の敷地内から須恵器・土師器・布目瓦片類が採集されており、遺跡としての認定を受けている⁴。また、東側に隣接する仙崇寺小松原墓地（現在の小松原公園）においても須恵器片が採集され、遺跡の包含地がより広いことが想定されている。

2 調査成果

1995（平成7）年に仙崇寺と道路を挟んで隣接する附属病院敷地（本荘・九品寺地区A）北東部において計画されたRI総合センター遺伝子実験施設の建築に先立ち試掘調査を実施したところ、良好な状態で古代の遺構群が検出され、遺跡の広がりを確認することができた。よって、遺跡の範囲は東西500m、南北500mを越えるものと推定される。

本地区で最も古い時期の遺物としては、9511調査地点（本荘・九品寺地区B・医学部RI総合センター遺伝子実験施設建設地）の縄文時代後期後葉（3500年前）の御領式土器とそれらに伴う石鎌・打製石斧・磨製石斧・スクレイパーなどがまとめて発見されている。残念ながら住居址などの遺構は検出できていないが、本地域一帯が当時より居住地となっていたことを知ることができる。

次の時期の弥生時代の遺構・遺物としては、弥生時代早期（2500年前）の環濠が本荘・九品寺地区Aの0104・0712調査地点において検出されている。この環濠は底面が台形のもので、上部が掘削されているが、もともとは幅3m、深さ2mほどはあったと思われる。南側は旧建物で破壊されているが、北側は白川方向へ更に延びていることが予想される。



写真8 最初の本格的調査9601調査地点遠景

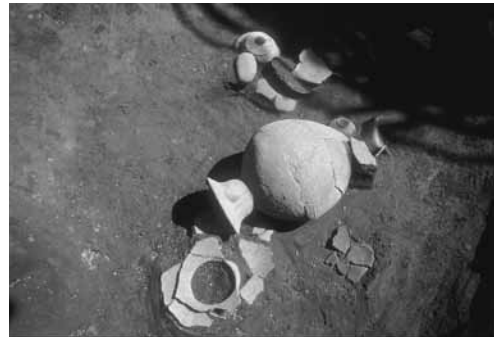


写真9 0119調査地点の古墳前期の溝と遺物



写真10 0509調査地点の古墳中期の住居址



写真11 古墳前期の溝に捨てられた土師器

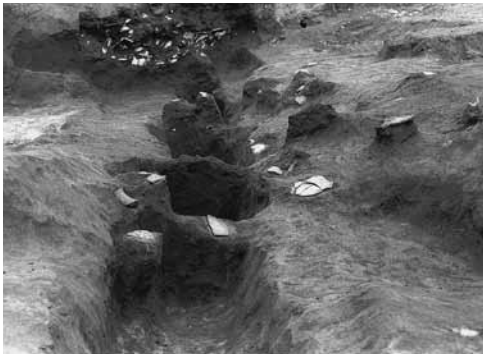


写真12 9601調査地点の古代溝

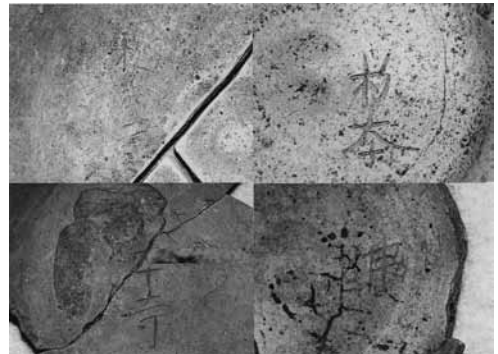


写真13 土器に刻まれた「杵本寺」・「佛」

古墳時代には4世紀代と5世紀代の遺構が検出されている。本荘・九品寺地区Aの白川沿いの0006・0104・0304調査地点では多量の土器を廃棄した幅2m、深さ1.5mの濠状の遺構が検出されている。遺構の性格はよくわからないが、土器は祭りなどを行って廃棄された状況を示しており、墓を区画する溝である可能性が高い(写真9)。この4世紀代の時期の住居址は発見されていない。これに対し、5世紀代の遺構は竪穴住居址を中心としたもので、本地区の南西部を中心に10基ほどが確認されている(0411調査地点：ポンプ室建設地・0509調査地点：山崎記念館曳き家地)。内部からは廃棄された土師器や須恵器などの各種土器がほぼ完形の状態で発見されている(写真10・11)。これらには2×2間の掘立柱建物(倉庫)が伴う。



写真14 9601調査地点古代溝から出土した土器類

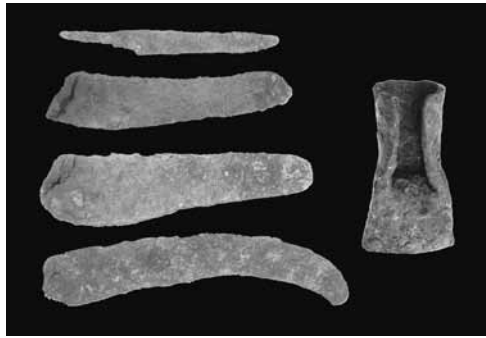


写真15 9601調査地点古代溝から出土した鉄器類



写真16 0707調査地点の小区画水田



写真17 9801・0712調査地点出土の帯金具



写真18 9511調査地点の発掘の様子



写真19 9511調査地点の古代竈

次の7世紀後半から9世紀後半にかけての古代の遺構は本地域の中心をなす遺構群である。溝や竪穴住居址などからなる。本荘北地区の北東部の9601調査地点（基礎医学研究棟建設地）と南西部の0411調査地点・0509調査地点からは8世紀代の幅1m、深さ1.8mの溝が掘られており（写真12）、9601調査地点の溝内部には「杵本寺（くほんじ）」や「佛」銘が刻まれた土師皿（灯明皿）を含む多量の土器及び斧や鎌などの鉄製品が廃棄されていた（写真13～15）。豪族の氏寺の跡と考えられる。本資料は現在の「九品寺」という地名の由来を示す貴重なものである。

9世紀後半以降は、この地は畠地若しくは水田となっており、削平を免れた谷部には畠の畝や水田の畦、水路が洪水砂に覆われて良好に残っている。

医学部保健学科の位置する本荘・九品寺地区Cは、本格的な発掘調査が実施されていないため詳細は不明であるが、敷地中央部における立会調査において古代の遺物包含層が確認されている。

第3項 大江地区・大江総合運動場

1 遺跡の概要

薬学部が所在する大江地区は、大江遺跡群（熊本市埋蔵文化財地図No. 8-93）の南西端に位置する。また、大江総合運動場は本遺跡群の北東端に位置している。遺跡は白川河岸の標高13~20mの段丘上にある。本遺跡群は詫間郡家及び渡鹿廃寺などの推定地を含む熊本市内でも有数の大規模（東西1.8km、南北1.7km）かつ貴重な古代を中心とした遺跡群であり、これまで熊本市による60次にわたる調査が実施され、各種遺物を伴って、8・9世紀代を中心とした古代竪穴住居址群、掘立柱建物址、道路址、溝址などが検出されている⁵。

2 調査成果

本学が実施した調査においては、総合運動場整備に伴う調査（9408・9413調査地点）によって古代の竪穴住居址や道路址が、また、体育館耐震改修に伴う調査（0819調査地点）によって、古代の竪穴住居址、道路址、掘立柱建物址、小児蔵骨壺が検出されている（写真20）。大江地区（薬学部敷地）においては北西部に古代包含層の一部を確認しているにすぎない。



写真20 体育館内での調査（0819調査地点）

第4項 附属小・中学校、附属教育実践総合センター

1 遺跡の概要

附属小学校・中学校の所在する京町地区は京町台遺跡群（熊本市埋蔵文化財地図No. 8-45、東西400m、南北350m）に包括され、同遺跡群内には熊本市立京陵中学校と熊本営林局も含まれる。本台地は熊本平野の北部にある阿蘇4火砕流（凝灰岩）が形成した標高30~40mの平坦な台地であり、東西両側はそれぞれ坪井川と井芹川が流れて急峻な崖地を形成している。この天然の要害ともいべき地の利を活かして、



写真21 9405調査地点遺構検出状況

台地の南端には熊本城が、周辺の台地上には武家屋敷が築かれていた。本遺跡における発掘調査の嚆矢は、1966（昭和41）年、営林署内の宿舎改築工事の際、重弧文をもつ弥生式土器、土師器、瓦器片が少量出土したことであり、現在では弥生時代の遺跡として認定されている⁶。

2 調査成果

これまでの発掘成果によると、構内の西側を中心として、敷地内の造成による破壊を免れた部分で、弥生時代～近世の遺構・遺物が確認されている。9405調査地点（コンピュータ棟建設地）では弥生時代後期の住居址や石棺墓、近世武家屋敷の一部と思われる井戸やゴミ穴が検出されている（写真21）。

第5項 合津マリンステーション

1 遺跡の概要

理学部附属合津マリンステーションは熊本県上天草市松島町合津に所在する。この松島を含む一帯は有明海から不知火海へ抜ける海上交通の要衝にあたり、天草で唯一の形象埴輪を出土したカミノハナ古墳群や長沙連古墳、大戸鼻古墳群など重要な古墳が密集する拠点である。また、縄文時代の遺跡としては、カルワ島遺跡や柳遺跡のように海岸部や海底に位置する遺跡群が数多く発見されている。合津マリンステーションの敷地は、1956（昭和31）年に天草で初めて発見された縄文時代遺跡として著名な前島貝塚（熊本県遺跡地図57-013）とその東部にある梅殿古墳（同014）の隣接地にあたる⁷。1996（平成8）年、マリンステーションの北部丘陵斜面にある宿舎が建設された際に7本の石斧が発見され、これまで船着場南側の海岸では本学考古学研究室の学生らによって、縄文時代早期～前期を中心とした土器や石器が採集されている。

2 調査成果

本地区においては、1995（平成7）年に実験棟改築工事に伴う発掘調査（9509調査地点）が唯一の調査である。敷地内で最も高い研究飼育棟前面の駐車場部分（標高12m）から、縄文時代早期（8000年前）の石蒸料理に使われた集石遺構（写真22）とともに、押型文・無文・



写真22 縄文時代早期の集石（9509調査地点）

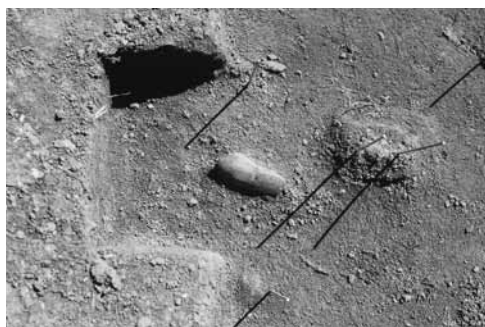


写真23 同石斧出土状況（9509調査地点）

条痕文土器、石鏃や石斧（写真23）などの石器が発見された。この上部には貝殻を含む近現代の耕作土層があり、調査地点に近接する前島貝塚は貝塚ではなく、畠に肥料として撒かれた貝類と耕作によって露出した条痕土器が混在した状況を貝塚と誤認した可能性が高い。

第6項 構内遺跡の調査成果と課題

以上見てきたように、本学の各地区には、それぞれの特質や個性をもつ遺跡が存在していた。黒髪地区、本荘・九品寺地区、大江地区・大江総合運動場はほぼ白川の中流域にあり、縄文時代から古代の集落に加え、古代官衙及び寺院関連の遺構や遺物が検出されている。また、黒髪地区は弥生時代の大規模な集落の一端を垣間見せる甕棺墓地が展開していた。残念ながら、これらが発見された黒髪南地区の西半分は旧工学部運動場建設のため旧地形から2mほど削平されていたが、傾斜地形の縁辺部に甕棺墓が破壊を免れて残存していた。このためか、残念ながらこの時期の住居址などの生活に関わる遺構はまだ発見されておらず、黒髪地区周辺の地域を含めた将来的な課題である。

また、この白川中流域は、縄文時代には渡鹿貝塚など市内でも重要な遺跡が近傍に所在する。それを反映して、縄文時代早期の遺物群を含む黒髪地区のみならず、本荘・九品寺地区や大江地区・大江総合運動場敷地内からも後期～晩期を中心とした縄文時代の遺物群が多数出土する。遺跡規模はまだ不明であるが、これら点的な資料を丹念に集成しながら、一帯における縄文集落の変遷を追いかけていきたい。

この白川中流域は、本学黒髪地区にその存在が想定される郡衙及び蚕養駅を通る大宰府への官道を軸とした古代条里制の展開した地域である。大学の敷地はこれらを取り込むように位置しているが、構内遺跡から発見される墨書土器や刻書土器、青銅製ベルト金具、円面硯などの遺物や道路址、掘立柱建物、井戸、火葬墓などは、今後、役所や寺院などの地理的配置を考察する際の手掛かりとなろう。また、同時に検出された多数の古代竪穴住居址群は都市や集落景観の変遷や律令体制の浸透を物語る貴重な資料であるばかりでなく、ここから発見されるイネやムギなどの炭化穀物も、古代人たちの食を物語る具体的かつ貴重な資料と思われる。

また、新しい知見として、本荘・九品寺地区Aの白川に近接した地点で検出された弥生時代早期～前期の環濠、古墳時代前期の周溝墓を思わせる溝群や中期の集落址などは、本地域では初めての考古学的発見である。更に古代豪族の氏寺と推定される「くほんじ」は文献には現れておらず、古代研究史上貴重な地域資料となった。

このような17年間の構内での発掘調査を通じて得られた情報や遺物は極めて貴重な歴史資料である。今後は展示や講演会などを通じて、学内及び地域市民へ広く公開し、活用していかなばならない。

第4節 今後の課題と将来への展望

これまでに述べてきたことを踏まえ、調査室の課題と展望を整理しておく。

- ①運営：学内の開発事業は、文化財保護法（1950年）に則って進められ、遺跡の調査もこれに関わって実施されている。市内の遺跡を管轄する熊本市教育委員会文化課（現熊本市教育委員会観光文化交流局文化振興課）、学内事務を担当する旧施設部施設企画課（現運営基盤管理部施設企画ユニット）、旧総務部人事課・労務安全課（現運営基盤管理部人事・労務ユニット）との連携は今後も欠かせない。3者の協力のもとに熊本大学にふさわしい開発事業と文化財保護の発展を目指すことが事業の基本であり、望ましい関係の維持は今後の継続的な課題でもある。
- ②質の高い調査：調査室の発掘調査は行政上記録保存と呼ばれるものの、発掘調査の宿命である遺跡の破壊と表裏である。その調査は一種の行政調査であるが、内実は学術調査と変わるところはない。大学内の開発事業により遺跡をやむなく記録保存の措置とする場合は、大学の調査室としてこれからも質の高い調査を継続し、遺跡の価値を十分活かすことに努めたい。
- ③報告書：発掘調査に続く報告書作成は調査室の重要な業務である。調査室では発掘調査の概要を年度ごとに『年報』として報告しているが、これはあくまでも概要であり速報である。発掘調査の成果は、データの詳細な記述と分析を踏まえ、遺跡のもつ歴史的な意義を明らかにするために正式報告書としてまとめる必要があり、個々の発掘調査はこの報告書の刊行をもって一段落となる。調査室ではこれまでに6冊の報告書の刊行を終えているが、なお未刊行のものもあり、これを急ぎつつ大学の調査室にふさわしい学術レベルを備えた報告書の作成に今後も努力していきたい。
- ④資料の活用：発掘調査の成果は報告書の刊行だけでなく、学内の教育や学内外に公開されて真に意味をもつ。新築された調査室には展示スペースを設けているが、諸般の事情により展示は実現していない。重要な遺跡と豊富な資料に恵まれた大学構内遺跡の価値を広く共有するために、展示室の充実を強力に推し進めたい。
- ⑤普及活動：調査室では、五高記念館の協力を仰いでこれまでに学生や一般市民を対象にした公開講座、展示会を行ってきた。また、大規模な発掘調査の際には現地説明会を開催している。発掘調査現場の見学を教養教育の授業にも開放しているが、活用はいまだ少数である。しかし、こうした活動は今後重要になると考えており、五高記念館・工学部研究資料館・熊菓ミュージアム・図書館展示室など学内の博物館施設と連携して、効果的な生涯教育活動の展開に寄与することを展望している。

今後も熊本大学の調査室としてその役割を十全に果たすべく、尽力していきたい。埋蔵文化財調査委員会をはじめ、学内関係組織各位のご指導とご協力を切望する。

引用・参考文献

- 1 新熊本市史編纂室『新熊本市史料編 第1巻 考古資料』（熊本市、1996年）
- 2 木下良「肥後国府の変遷について」『古代文化』9-27、（古代学協会、1975年）1～19ページ

- 木下良1995年「肥後の古代交通路」『火の国の原像』（第10回熊本地名シンポジウム記録、1995年）13～35ページ
- 3 鶴嶋俊彦1997年「肥後国北部の古代官道」『交通史研究』（古代交通研究会、1997年）39～66ページ
 - 4 熊本市教育委員会『熊本市中央北地区文化財調査報告書』（1980年）
 - 5 註1に同じ
 - 6 熊本市文化財調査会『昭和44年度熊本市文化財調査報告書Ⅱ 北部地区』（1971年）
 - 7 熊本県教育委員会『熊本県文化財調査報告第9集』（1968年）